＜前回＞スコラ的文化総合と大学の時代

（１）宗教と文化

１．「キリスト教と文化」の関係についての類型論（ヘルムート・R・ニーバー）
　断絶・対立／中間（階層性、緊張、回心・変革）／連続性

２．スコラ的な文化総合、存在の大いなる連鎖（神から物まで）　cf. 近代以降
　階層的秩序：自然と超自然の区別と調和 → キリスト教世界の構造的安定性。

３．スコラ学（13 世紀）：哲学（ギリシャ哲学）と神学：相互連関・相互影響。緊張関係。
　神の知としての神学、「聖なる教」（sacra doctrina、トマス）

４．「自然の光のもとに知られうるもの」と「啓示の光において知られうるもの」。

５．パネンベルク『学問論と神学』教文館。

「神学の学問性が十三世以来初めてその自己理解についての議論において優先的な役割を果たすようになったことである」、「十三世紀というのは、一二〇〇年頃にパリ大学が誕生したのを筆頭に最初の大学が誕生したのを見届けた時代である。」「神学の学問性という主題は、神学を大学とのその中で結びつけられた諸学問との中に位置づけるという主題と共に与えられる。それゆえその主題は十三世紀において初めて、特にアリストテレスの学問概念に誘発されて生じたのである。」

６．ハンス・キュンク『キリスト教思想の形成者たち――パウロからカール・バルトまで』新教出版社。

「トマスの世紀であるまさにこの十三世紀に、教育の中心としての修道院が解体され、大学とともにそこでの学問が登場した時」、アリストテレスの哲学は「画期的な作用を及ぼすことになった。」（153）

７．アーウィン・パノフスキー『ゴシック建築とスコラ学』ちくま学芸文庫。

「盛期スコラ学の顕著な諸特徴は盛期ゴシック芸術を性格づけている諸特徴と著しく類比

８．ル＝ゴフ

ジャック・ル＝ゴフ『ヨーロッパは中世に誕生したのか？』藤原書店。

・13 世紀の意義

「十三世紀は、西洋中世の最盛期とみなされている。・・・この時期には、長期持続の観点からヨーロッパ・モデルと呼ぶことのできるようなあるモデルが重要性をもつようになる。」「都市のヨーロッパの形成」、「商業の成功と商人たちの地位向上」「貨幣使用の普及」、「知の分野における成功」「学校」「大学」（224）。

・中世都市

「「中世において都市は消費の中心になる」（225）

「農村の民衆は・・・奴隷、のちには農奴の地位にありつづけた人々で構成されていたのに対し、都市住民であることはすなわち自由であることだった。そもそも、こんなドイツ語のことわざが生まれたのは中世のことだ。「都市の空気は自由にする Stadtluft macht frei」。」（226）

「アルベルトゥス・マグヌス」「一連の驚くべき説教」「一種の都市の神学、都市の霊性論であり、狭くて暗い街路は地獄に、大きな広場は天国になぞられている。」

「ウンベルト・エーコは、建造物のなかに具体化され、街のスコラ学によって理論づけられるこのような中世的美の出現をみごとに指摘している。」（227）

・大学

「今日なおも生きつづける伝統を打ち立てた創造とは、大学と呼ばれる「高等」学校の創設であった。」「一二二一年にパリで「パリの教師と学生の共同体 universitas magistrorum et scolarium」を指してはじめて用いられた、ウニヴェルシタスという名称」（270）

　学部間の序列：

　　基礎教養課程、三学（トリウィウム、文法学、修辞学、弁証学（論旨学））と四科

（算術、幾何学、天文学、音楽）
法学部（民放と教会法）、医学部
神学部

・書物

「十二世紀ルネサンスの延長として、十三世紀には書物の発達が確かなものになった。」「最初の発達は四世紀から七世紀までのあいだ」、「コデックス[冊子本]」「写本にページの革命がもたらされた。」(279)

「イバン・イリイチ」「「一一四〇年頃、書物の文明において、修道院のページが閉じられ、スコラ学のページが開かれる」。」「新たな読書術の創始者は、パリ近郊のサン・ヴィクトール修道院の学識豊かで偉大な神学者であったサン・ヴィクトールのフーゴーである。」

「句読法が改良され、写本のなかには各種のタイトルや見出しが挿入され書物は章に分けられ、アルファベット順に分類された主題索引が加えられた」、「特別な聴衆を前にする時をのぞいては音読が放棄され、個人的な黙読が始まった」、「個人的読書のヨーロッパが生まれたのだ。」(280)

・スコラ学

「十三世紀の、とくに大学での知的活動が残したもっとも重要な遺産は、スコラ学という名で一括されている方法と著述の総体である。つまりこれは、十三世紀以降学校と結びつくようになった、そしてとくに十三世紀の大学と結びついていた知的生産を指している。」

「スコラ学は、三学のひとつで、「対話的状況のなかで問いと答えよって論証を進める技術」である、弁証学から生じたものである」、「スコラ学の父は」「カンタベリーのアンセルムス」、「弁証学が目標とするのは」「「理解を求める信仰」である。」(286)

「大学ではます問題（クワエスティオ）が立てられ。つづいてこの問題が、教師と生徒たちのあいだで討論（ディスプタティオ）にかけられた。最後に、教師はこの討論された問題に対する解答（デテルミナティオ）を与える。」(287)

「選集（フロレギウム）」、「命題集（センテンティアエ）」、「大全（スンマ）」

「知の総体」「を有機的に関係づけ、神学という理論的に構築された集大成の中にまとめる」、「科学としての神学」「そもそも「神学」という言葉は十二世紀の発明で、大学人のさきがけ的な偉大なる教師アベラール以来のものです。」

「都市のみが」「都市に定着した托鉢修道会のみが」「このような新しい段階を記すことができたのであって、修道院や司教聖堂付属学校の古い世界はこのような状況に適応していませんでした。」（ル＝ゴフ『中世とは何か』藤原書店、150）

8．　自然神学の諸問題

（1）自然神学と中世の知的統一世界

1．二つの書物、啓示神学と自然神学：神についての知識の獲得に関わる二つの道

・神の啓示、とくに聖書テキストに基づく神学＝啓示神学

・人間の自然的理性（理性本性）の能力による神認識＝自然神学

創造論　→　世界は神の被造物、その中には人間理性が理解可能な合理的な秩序・法則が存在する（知恵思想）。

→　科学的探究は神の偉大な創造行為を讃美する宗教的に意義ある行為（以下引用の詩編 19 編を参照）

→　自然科学の基本前提

自然の合理性と人間理性による理解可能性

2．「世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物において現れており、これを通して神について知ることができます。従って、彼ら

には弁解の余地がありません。」（ローマの信徒への手紙 1.20）

「2　天は神の栄光を物語り／大空は御手の業を示す。3　昼は昼に語り伝え／夜は夜に知識を送る。4　話すことも、語ることもなく／声は聞こえなくても　5 その響きは全地に／その言葉は世界の果てに向かう。そこに、神は太陽の幕屋を設けられた。」（詩編 19 編）

３．自然神学：世界の秩序の探求から神へ

宇宙論的類型：トマス（５つの道）、ニュートン、人間原理

・経験的事実から神へ（因果律、目的論）

・運動・変化の存在／「原因―結果」の連鎖／第一原因　　→　これを神と呼ぶ

４．中世の統一的な知の世界（神の創造した合理性の客観化）

神学（啓示神学）／神学（自然神学）／哲学／自然学・諸科学

↓

・自然神学は知的世界の統合の要の位置にある。

・実在の構造　／　知識の構造　／　大学という制度的な構造　→　文明の形

（超自然/自然）

（２）自然神学の二つの道

５．宇宙論的類型：アンセルムス『モノロギオン』

６．存在論的あるいは本体論的類型：アンセルムス『プロスロギオン』

知識・観念（思惟）から実在へ

「それ以上大いなるものが考えられないあるもの」

（aliquid quo nihil maius cogitari possit）

・存在論的な神の存在論証といわれる『プロスロギオン』（第２，３，４章）には、第１章「神の瞑想へと精神を喚起すること」(Excitatio mentis ad contemplandum deum) という神への祈りが先行。

信仰のラチオについて瞑想は彼の存在論証を論じる前提。

アンセルムスの論証を批判したガウニロも信仰者であった。

↓

『プロスロギオン』の「知解を求める信仰」(fides quaerens intellectum)、あるいはそれに先立つアウグスティヌスの「信仰が尋ね、知性が見いだす」（Fides quaerit, intellectus invenit）という言葉。　→　バルト神学に至るまでキリスト教神学の基礎。

自然神学はこの信仰の運動の外に存在しているのではない。

・比較級（maius）の意義：神の自己凌駕性

ハーツホーン

最上級は静的、比較級は動的

・バルト、ハーツホーン、ゲーデル、プランティンガ

７．瀬戸一夫『神学と科学――アンセルムスの時間論』勁草書房。

８．山田晶「自然神学――その歴史と現代的意味」（『在りて在る者』創文社、1979年）

（３）自然神学の概要と課題

<u>Ａ．自然神学・構造</u>

自然神学（natural theology）は、啓示神学（revealed theology）と対をなす、キリスト教思想の伝統的なテーマである。一般に、啓示神学が神の啓示の書物である「聖書」を通した神認識であるのに対して、自然神学は神の被造物（作品）としての「自然」を通した、あるいは人間の自然の理性的能力による神認識と説明される。聖書と自然を神認識のための書物とする「二つの書物」説はその典型であり、また宇宙論的な神の存在論証は、自然神学

の代表的な議論と言える。

こうした意味における自然神学については、ローマ・カトリック教会とプロテスタント教会との対立を歴史的背景として、とくに、プロテスタント的立場のキリスト教思想家によってしばしば否定的な評価がなされてきた。聖書的啓示なしに神が認識可能であるというのは、異端的また異教的、非難すべき中世カトリック教会的な遺物であるとの見解である。たとえば、1930 年代の有名なバルト(Karl Barth)とブルンナーの「自然神学論争」は、プロテスタントにおける反自然神学的立場を印象づけるものとなった。しかし、こうした状況は、最近の自然神学をめぐる研究の進展に伴い、大きな修正をせまられている。

自然神学の歴史・問題状況

自然神学の歴史は、古代イスラエルの宗教思想と古代ギリシャの哲学的神学とが古代キリスト教思想形成期に遭遇した時点にまで遡る。たとえば、ローマの信徒への手紙 1 章 18 節～ 23 節におけるパウロの思想は、キリスト教自然神学の発端をして位置づけられる。このような思想連関において注目すべきは、自然神学が学としてのキリスト教神学自体の不可欠の構成要素あったという点である。4 世紀のカッパドキアの三教父において確認できるように、キリスト教神学は異教文化に対するキリスト教の弁証とキリスト教内部における異端との対決を担うものとして形成され、この弁証と論争とを支えていたのが、自然神学だったのである。

こうした自然神学の伝統は、中世神学から近代神学へと継承された。中世における自然神学を代表するものとして、トマス・アクィナス(Thomas Aquinas)が『神学大全』で提示した「五つの道」の議論を挙げることができる――こうした中世神学における自然神学の展開が後に自然神学はカトリック的との誤解を生じた――。これは、宇宙論的な神の存在論証の模範的な議論であるが、トマスの神の存在論証は、自然学的知（運動や因果律などについての知識）とキリスト教神学的知（啓示神学）とを論理的に媒介することによって、キリスト教的で統一的な知の世界の構築（スコラ的文化総合）に基礎を与えた。最近の研究が明らかにしたように、自然神学は近代のプロテスタント・キリスト教思想へと受け継がれ、たとえば、ニュートン(Isaac Newton)とニュートンの弟子たちによるニュートン主義の自然神学（デザイン神学。世界に見いだされた見事な秩序・法則性＝デザインからデザイナーとしての神を推論する）を生み出すことになった。ニュートン主義の自然神学は 19 世紀半ばの進化論の登場まで（あるいはそれ以降も）、大きな影響力を保持し続けたのである。

その後、先に指摘した、現代プロテスタント神学における自然神学批判（バルトとブルンナーの自然神学論争）の影響で、自然神学への関心は急速に後退することになるが、キリスト教的知の再構築の必要性が意識されるなか、近年自然神学に関わる様々な試みが行われている（参考文献を参照）。

自然神学の新しい可能性

最近のキリスト教思想における自然神学への取り組みとの関係で、まず確認すべきは、広義の自然神学と狭義の自然神学との区別である。これまで、自然神学については、たびたび自然を通した神認識であるとの理解がなされてきた。たしかに、自然を通した神の認識は、伝統的な自然神学で大きな部分を占めてはいるが、しかし、これはいわば狭義の自然神学と言うべきものであって、本来キリスト教自然神学はより広義に解釈できるものだったのである。前述のように、自然神学は、異教文化への弁証や異端との論争といった、立場を異にする他の思想との対論・対話の前提として存在していた。これは、討論の場において出会う多様な思想が相互に理解あるいは論駁し合うために共有する理性的な能力であって、自然神学の「自然」とは、この「自然本性」という意味で、本来広義に解釈でき

るものだったのである。したがって、自然を通しての神認識は、この広義の自然神学が、古代イスラエルの宗教思想と古代ギリシャ思想とが自然学的知（創造と知恵）を共有していたことに基づいて､歴史的に形成された特殊な自然神学であったと解することができる。

近年の新しい自然神学研究では、自然神学が本来有していた意図を、現代の思想状況において追求することが試みられている。それは、キリスト教神学と現代の諸科学・諸思想との対話可能性の具体的実現としての自然神学であり、キリスト教思想をコミュニケーション合理性の上に形成し直す作業にほかならない。これは、キリスト教思想のみの問題ではなく、他の思想との対話をめざすすべての宗教思想が共有する問題と言える。つまり、仏教的自然神学や神道的自然神学とでも言い得る思想形成が、自然神学の問題領域で問われているのである。ここで、自然神学の問題は、公共性の問いと結びつくことになる。

＜参考文献＞

１．芦名定道『自然神学再考――近代世界とキリスト教』晃洋書房、2007 年。
２．マクグラス『科学と宗教』教文館、2003 年。
『「自然」を神学する――キリスト教自然神学の新展開』教文館、2011年。
３．モルトマン『神学的思考の諸経験――キリスト教神学の道と形』新教出版社、2001年。
Ｉ　神学とは何か
第六節　自然神学
１　キリスト教神学の前提としての自然神学
２　キリスト教神学の目標としての自然神学
３　キリスト教神学自体がシンの自然神学である
４　キリスト教神学の課題としての自然神学
『科学と知恵――自然神学と神学の対話』新教出版社、2007年。
４．Ａ・Ｓ・マクグレイド編『中世の哲学　ケンブリッジ・コンパニオン』
京都大学学術出版会、2012年。
５．Ｅ・グラント『中世における科学の基礎づけ――その宗教的、制度的、知的背景』
知泉書館、2007年。
６．Dieter Henrich, *Der Ontologische Gottesbeweis. Sein Prblem und seine Geschichte in der Neuzeit*, J.C.B.Mohr, 1967.
７．Alvin Plantinga, *The Nature of Necessity*, Clarendon,　1974.
８．John Hick, *An Interpretation of Religion*, Yale Univ. Press, 1989.